# 放送視聴票 第 2 回（bijyutu202503 + bijyutu202504）

■ bijyutu202503：鑑賞

【美術の約束事】
美術作品を見ることは、ただの観賞ではありません。見るという行為が美術の本質に関わってきます。
作品が単なるモノから、美術としての意味をもつのは、見る人の存在によって初めて可能になるのです。

【鑑賞を楽しむ手がかり】
観察・想像・解釈を大切にし、ただ見るだけでなく「何を感じるか」「何を考えるか」を大事にします。
表現された人物が話していることを想像したり、音や香りまで感じるつもりで鑑賞すると、世界が広がります。

【探究的な鑑賞】
現代の美術館では、美術作品を通して「アイデンティティ」「ジェンダー」「気候変動」などのテーマにアプローチする鑑賞もあります。
作品そのものの理解だけでなく、自分が考えるきっかけとして美術を捉える姿勢が求められています。

■ bijyutu202504：光と影

【光と影から受ける印象】
光のあたり方によって「陰」と「影」が生まれ、それにより作品の印象が大きく変わります。
レンブラントの作品では、強い光と影を使って人物の存在感や感情を際立たせ、ドラマチックな雰囲気を生み出しています。
一方、ルノワールのような印象派の画家は、木漏れ日など自然の光を柔らかく表現し、明るい印象を描いています。

【光と影の関係】
西洋では、ルネサンス以降に光と影を使ったリアルな表現が発展しました。
それに対して、東洋の美術では線描を重視し、陰影表現をあまり用いない特徴があります。
表現の優劣ではなく、文化や表現目的の違いであることを理解することが重要です。

【レンブラントライティング】
『夜警』に見られる「斜め上からの光の演出」は、レンブラントライティングと呼ばれ、現在の映画や舞台照明でも使われています。
光の使い方ひとつで作品の印象や伝わる感情が変わることを意識し、表現に活かす視点を学びましょう。